

植物雑考

早春の花タビラコ (コオニタビラコ)

古歌に「芹なずな御形はこべら仏の座すずなすずしろ」これぞ七草とよまれている。これが春の七草で現代風によみ替えると「セリ、ナズナ、ハハコグサ、ハコベ、タビラコ、カブ、ダイコン」となる。つまり芹はセリ、御形(ごぎょう)はハハコグサ、はこべらはハコベ、仏の座はキク科のタビラコのことでシソ科のホトケノザではない。すずなはカブ、すずしろはダイコンのことである。この七草のうちカブ、ダイコンの野菜を除いた野草はいずれも越年草で正月の七草粥を作る頃は雪の積もらない地方では山野に生育していて摘み取れる草である。冬の食生活のなかで不足しがちな青物の野菜を補う手段として考えられた

正月の七草粥の風習、そして選ばれた野草が冬の時期でも摘み取れるものを選んだ昔の人の智恵の合理性には感心せざるを得ない。

この春の七草の野草のうちセリ、ナズナ、ハハコグサ、ハコベは現代でも普通に生育しているが、タビラコ(コオニタビラコともいう)は場所によっては希少植物とされている



▲タビラコ (コオニタビラコ)

所もある。

水田にはえるタビラコは同じ水田という土俵を共有して時期差でイネと住み分けて生き残っている野草である。秋に水田の水が落とされると種子から発芽し、イネが刈り取られると十分に日光を浴び冬までにしっかりとしたロゼットを形成して越冬し、春早くにタンポポに似た黄色の花を咲かせて、水田が耕起

されるまでに種を稔らせて水田に散布する。やがて耕起されると種は土中に入り、イネが生育する間は眠っていて、秋に水が落とされると発芽するという周期を繰り返す。つまり同じ水田を使ってイネと生育時期を住み分けて何千年と生き残ってきた野草である。

しかし、最近の稲作は秋に耕起されたり、コンバインの刈り取りによって藁が水田一面に敷かれて

タビラコが充分生育できなくなった条件などが重なってタビラコの姿が次第に消えていった。皮肉なことに都市化が進んだ東京都八王子市の住宅が並んだ一部に僅かな水田が残っているが、この水田はタビラコが住める稲作が行われていて春先にはタビラコが花を咲かせ吾が世の春を満喫している。(廣田伸七)

財団法人 日本植物調節剤研究協会

東京都台東区台東1丁目26番6号

電話 (03)3832-4188 (代)

FAX (03)3833-1807

http://www.japr.or.jp/

編集人 日本植物調節剤研究協会 会長 小林 仁

発行人 植調編集印刷事務所 広田 伸七

東京都台東区台東1-26-6 全国農村教育協会

発行所 植調編集印刷事務所

電話 (03)3833-1821 (代)

FAX (03)3833-1665

E-mail: hon@zennokyo.co.jp

平成18年2月発行 定価525円(本体500円+消費税25円)

植調第40巻第11号

(送料 270円)

印刷所 新成印刷(株)